

甲状腺外科草子 140 哲人宰相：大平正芳余話⑪

杉野 圭三

日中国交正常化交渉（後）

日中国交正常化には、大きな問題があった。「戦争状態終了」と「台湾問題」である。

大平は会議に疲れ果て、「なかなか、これは君たちの言うとおりにならんね」と肩を落としていた。栗山条約課長は「いや、大臣これはにらめっこです、向こうも正常化を欲している以上、向こうも必死なのです。先に目を逸らした方が負けだから、ガツとにらめっこだと思って、頑張ってもらわなくちゃ駄目です」と勇気づけた。

日本代表団は中国側との交渉が進展しないことで失意のどん底だったが、田中角栄は自信にあふれ、マオタイ酒を飲み「そろそろ飯を食おうか」と楽しみに振舞い、高島条約局長に「ご苦勞だったな、あれ以上、周恩来が言ったなら、俺はガンとやり返すつもりでいた。だけどまあな、来たばかりだし、喧嘩しに来たのじゃないしな。ともかく、飯食ってからまた考えようや」と言った。

大平は「そんなこと言ったって、じゃあ明日からの交渉をどう持って行くのか。1945年に日本が無条件降伏して、1972年の現在まで戦争していたとでも言うのか」と反論した。

田中はマオタイを飲みほし、「大学を出たやつはこういう修羅場になると駄目だな」と笑った。

大平は「修羅場なんて言うが、明日からどうやってやるのだ、この交渉を」

田中は「明日からどうやって中国側に対案を作るかなんて、そんなこと俺に聞くなよ。君らは、ちゃんと大学を出たのだろ。大学を出たやつが考えろ」、部屋中が笑い声に包まれた。

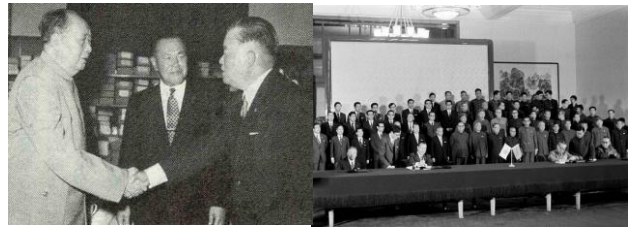
橋本外務省中国課長は食後に大平に提案した。「これから両国民が善隣友好関係を築いていくために国交正常化するのが大筋なので、中国側も当然わかっているはずですよ。過去の解釈について簡単な言葉で過去を封じ込めるために『不自然な状態』ということでどうでしょうか」

翌日この対案を示し、最終的に「日本国と中華人民共和国との間のこれまでの不自然な状態は、この共同声明が発出される日に終了する」と共同声明第一項に盛り込まれた。

第三回田中・周会談で周は「ソ連は核戦争禁止、核兵力使用禁止を提唱しているが、これは人をだますペテンであるから、あばく必要がある。ソ連に対する警戒心を失えば、ソ連にやられてしまう」と述べた。

中国側にもソ連との対立問題があり、日中講和を急ぐ必要があることが窺えた。

9月27日には、毛沢東から会談の申し入れがあり、田中、大平らが訪問した。



毛沢東との会見

日中共同声明調印式

毛沢東の第一声は「もう周総理とのケンカはすみましたか、ケンカしてこそ初めて仲よくなるものですよ」

田中は「いやいや、私どもの会談は大変友好的で、喧嘩などしておりません」

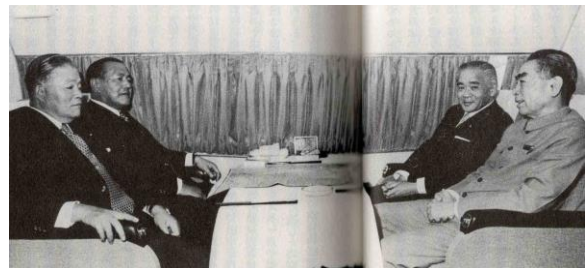
毛沢東は「雨が降って地が固まるという言葉があるように、議論したほうが却って仲よくなるということもありますよ」、さらに「迷惑の問題はどうなりましたか」

大平は「中国側の意見に従って、解決しました」と説明した。

毛沢東は「ご迷惑の解釈は田中首相の方がうまいそうですね」と言った。

最後に毛沢東は「ここには、私が読みきれないほどの本があります。私は好んで本をたくさん読みます。この本（楚辞集注）のセットを田中首相に進呈しましょう」と贈った。

田中は「毛沢東主席は博識深いお方だとは存じ上げておりましたが、しかし、陰でこのようなご努力があったとは存じ上げませんでした」と深く礼を述べ、頭を下げた。



上海行の航空機内

日中共同声明調印後、日中首脳は上海に向かった。田中は上海行に乗り気ではなく、すぐ帰国したかったが、周恩来の強い希望があり大平たちが説得した。機内で田中は周恩来の目の前で寝入ってしまった。二階堂が起こしめようと焦ったが、周は「二階堂さん、寝かしておきなさい」と笑った。

周恩来は国内の「四人組」への対応など困難な問題を抱え、この上海行は重要な意味を持っていた。

周恩来は毛主席を利用した巧みな技術で交渉にあたり、田中・大平も国内外の難しい政局の中で粘り強く交渉し、優れた政治家たちの外交であった。

（一甲状腺外科医の徒然なる随想）

2025年6月12日